

特集 「新しい古典学」

古典学の再構築 第5回公開シンポジウム報告

開会の辞

中根 千枝

評価委員・日本学士院会員

公開シンポジウム「新しい古典学」を開催するに当って一言御挨拶を申し上げます。

このたび刊行されました特定領域研究「古典学の再構築」の「第Ⅰ期研究成果報告」を拝見して、この共同研究がいかにおびただしいこれまでの諸研究の蓄積の上に立って、おし進められてきているということに圧倒されます。古典研究者がこうして一堂に会し、最新の情報処理技術をあわせ用いて研究をするという全く新しい試みの息吹きを感じられます。この報告にはそれぞれの異なる領域の研究者が、お互いに刺激を受け、視野を広げ、新しい問題意識が芽生えたり、今まで気がつかなかった共通の問題があることに思いついたり、従来の研究に新しい展開が期待される、などの記載がみられます。

今までそれぞれの分野で研究を進められてきた研究者の間の相互理解、共通認識がもたれるようになったことは、たしかに収穫ではありますが、一つの大型共同研究という立場からみますと、これまでのところは、その目的の実をあげるためのウォーミング・アップというところではないでしょうか。この共同研究が2年後に完了することを考えますと、これからの2年がとくに重要で、その進展いかんによって、これが本格的な共同研究の名にふさわしいものになるか、どうかの正念場ということになると思います。

総括班によると、今後の課題として、まず(1)古典学の方法論についての体系的共同研究、(2)として具体的テーマに関する異領域間の共同研究があげられています。(2)については興味あるアプローチで、建設的な内容が期待でき、成果が上るものと確信できますが、(1)の方法論についての体系的共同研究というのはどのように進められるのでしょうか。これからは積極的に領域横断の研究を進めるとありますが、それには比較を可能とする周到な方法論ならびに、共通の概念設定、分析用語が用いられなければならないと思います。文化的、社会的、歴史的背景の異なる領域における古典をどのように扱っていくべきか、また領域によって古典の認定基準が異なっていることをどのように処置していくべきか、問題は山積しているようにみえます。それぞれの領域における古典の特色をおたがいに披瀝しながら議論を深めていくうちに、何かよい方法が案出されるのでしょうか。普遍的な要素と特殊な要素を洗い出すといった指摘もありますが、それは安易なアプローチに陥る危険性をもはらんでいるような気がします。何をもちえて特殊とするかは慎重な手続きが必要でありましょう。

もうひとつ気になることを述べさせていただきますと、私の理解した範囲では、この共同研究において“古典”の概念が明示されていません。古典についての説明的文言は見出されますが、それらは比較研究に必ずしも有効な概念とはなりえていません。古典を多角的にとらえようとするアプローチの意義は高く評価されますが、多義的な古典という名の許に研究対象の拡散がみられます。果してこれで効果をあげうる比較といったものができるものかと心配になります。多分、それぞれの班、また領域においては共通の理解があるのかと思いますが、それでは共同研究全体としての統合はど

のようになされるのでしょうか。従来、多くの人文科学系の特定領域研究が陥りがちであった諸研究の単なる総和に終ることのないようにしたいものです。

この共同研究が目ざしているものは、諸文明の古典を一つの標準的方法論によって「現代古典学～一般古典学」とよばれるものの確立にある、とのことですが、その目標にいたる具体的なプロセスが私にはいまだよくわかりません。これらに関する掘下げなどもこのシンポジウムをとおして一段と進むことを期待する次第

です。また、この共同研究は日本学術会議に「古典研究所」の設置を提案されています。その実現に向っても、より具体的な説得力のある研究方法が明示されることが望ましいと思います。古典ならびに古典学の今日的重要性については誰しも認めるところであり、総括班の述べられている古典学再構築の意義には全く賛同するものでありますが、具体的な実現の手段についてより充実した歩みを切望して、私のご挨拶とさせていただきます。

